

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 1 1 号

2019 年 11 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助導源『わが主イエスよ』より (1 1)

第 12 講 難信と易行

信仰は難しい

ヨハネ伝には「イエスを人の子と信じたら救われる」、すなわち永遠の生命を与えられると書いてあります。そうしたら神の子と信ずるということはイエスのどこをどういうふうに信じたらよいのかと言ったら、これは非常に難しい。これを理性に訴えてわれわれ凡人が分かるように説明できる牧師は、日本においても世界においても、私は多くないだろうと思う。

パウロはロマ書におきまして、ヨハネ伝で言う「イエスを神の子と信ずる」ということを説明した。このイエスの救いの信仰を、ロマ書第 1 章から 4 章までかかって、数学的明確さをもって、人間の理性に訴えて分かるように説明した。この説明がまた難しい。私はロマ書第 1 章から第 4 章までをわれわれ凡人に分かるように説明し

てくれる先生は、日本においても世界においても、少ないだろうと思う。

ことほどさようにキリスト教の信仰は難しい。証拠がある。その証拠には、われわれ数十年「キリスト教を信じている」「信者だ」と言っておりますけれども、信仰の結果である平安な心がない。人を許す心がない。これは、われわれに信仰がないという証拠です。これは信仰がいかに難しいかという証拠です。

私は内村鑑三先生から聖書講義を聴いた

私たちは幸いに高等学校 3 年、大学 3 年と 6 年間、毎日曜、内村鑑三先生の聖書の講義を聴いた。特に大正 10 年、11 年とロマ書を聴きましたが、特に 1 章から 4 章までは大正 10 年に 10 数回にわたってこの場所を聴いた。ここに贖いの信仰をわれわれは教えられた。先生は大正 12 年に大きな集会をやめましたから、6 年間、学生時代に先生から聖書講義を聴いたというのは、われわれが終わりです。

そういうふうに先生のロマ書の講義を聴いた。その時出席していたのが 4、500 人だった。4、500 人集まったうちで、内村鑑三先生のロマ書の講義を信じた、分かった人がどれほどいたであろうか。また、それをずっと持ち続けておる人が何人いたか。「咲く花は多し、されど実となるは少なし。実となるは多し、されど熟するは少なし」と内村先生は仰せになりましたが、その 400 人、500 人のうちで、現在この贖いの信仰を持ち続けている人は私は寥々としているだろうと思う。事ほどさように信仰は難しい。

信仰とは贖いの恵みにより頼むこと

ロマ書は、1章から4章までは、キリスト教の信仰の説明として、誠に人類の有する宝でありますけれども、宝の持ち腐れと言いますが、これをわれわれが味わうということは至難。入信が難しいのみならず、これを継続して持つということはなおさら難しい。そんなものは impossible です。

アルトハウス先生は、彼の名著 NTD のロマ書注解において、信仰を説明した。「信仰とは、もはや自分自身の何物にも頼らず、ひとえに神がキリストの十字架において完成したまいし贖いの救いにのみより頼んで神の前に生活することである」とアルトハウスは言った。

彼の原語はドイツ語ですが、私のまずい英語で言いましたら、

Faith is a kind of life which man lives if a god depending no more upon his all being works, possessions, but depending upon God work of salvation of grace which was completed in Jesus Christ which the good news of the bible tells.

と、こういうふうな英語になるでしょう。…「信仰とは、もはや自分自身の何ものにも頼らず、ひとえに神がキリストの十字架によって完成したまいし贖いの救いにのみより頼んで、神の前に生活することである。」いかに難しいかということが分かる。入信が難しいし、これを継続することはなおさら難しい。

しからは、我々は落第か

イエスは「汝ら、幼子の如くならずば天国にいることはできない」と言った。幼子のごとくなるということは非常に難しい。これを継続することは、なおさら impossible。

しからは、我々は落第か。ノー。ありがたいことにはロマ書 10 章 9 節、10 節には、救われる条件が二つ挙げてある。第 1 には、贖いを信ずるといふ難しい信仰と、もう一つは、「主よ、救い主なり」と告白するといふ条件。この二つを救いの条件とした。ありがたい。信仰の方は難しいけれども、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶことは易い。誰でもできる。

「わが主イエスよ」といえば及第

そうですからロマ書 10 章 9 節、10 節によりますと、二つの条件、「わが主イエスよ」と言うことと、これも難しい信仰と、易行と難信とが救いの条件になっている。そうしたら、われわれは「わが主イエスよ」と言えば一問題を完全に満たしている。そうですから資格試験でいえば、2 問題のうち 1 問題だけ、50 点取っている。これで及第ですよ。資格試験に 50 点取ったら及第だ。そうですから、我々は天国に行く永遠の命を得るためには、「わが主イエスよ」と主の名を呼べば及第。これがロマ書 10 章 9 節、10 節に明確に書いてある。

なおさらありがたいことには、ロマ書 10 章を進んで行きますと、12 節、13 節には、難信の難しい条件が消えて、ただ主の名を呼ぶ者が救われると、条件がただ一つになっている。易行の中に難信を含めた。二つの条件を一つにした。これを福音という。原語の読める人は、ロマ書 10 章 1 節から 13 節を熟読しなさい。神の無限の救いの富が、無限の恵みが人類に迫っている

知るも知らぬも皆迎えよう

故に、ロマ書の主張は「イエスの贖いによって、わが主イエスよと主の名を呼び求める者は救われる」と、これがロマ書の主張です。

「われだにも、まず天国に生まれなば、知るも知らぬも皆迎えてん、主の名を呼ぶことによって」

「われだにも、まず天国に生まれなば、知るも知らぬも皆迎えてん。主の名によって祈って」

Joel、Jesus、Japan

聖徳太子は「日域、大乘相応の地」と仰せになった。「日本の国は、仏教の粹がここで明らかにされる土地である」と聖徳太子は仰せになった。私は、キリスト教の粹が日本において明らかにされて、全人類に及ぶのではあるまいかと思う。内村鑑三は **Jesus and Japan** と言ったが、私は二つの **J** の他に **Joel** (ヨエル) という **J** を付け加えたい。「主の名を呼び求める者は救われる」というのはヨエルの預言です。ヨエル (**Joel**) の預言がイエス (**Jesus**) において実現され、イエスの実現された救いが **Japan** において、人類世界、人類に明らかになると私は信ずる。

頼りになるのは聖書の文句

サンデー先生とヘッドラム先生、この両先生は、有名な ICC のロマ書の注解——この本の第1版は1895年に出ているのです——において曰く、「われら人類は1900年かかって、まだロマ書の説いている真理を知り尽くしていない」、exhausted していないと言った。

知らずや、このロマ書の最も深い真理、10章1節から13節までの真理は日本において明らかになるのではあるまいか。ロマ書1章16節、17節はマルティン・ルーテルによって世界に鳴り響き、ロマ書13章終わりの節はセント・オーガスティンをもって世界人類に感動を与えたが、知らずや、ロマ書10章1節から13節は、日本の恵心僧都の名において人類世界に貢献するのであるまいか。

法然上人は「信じても信ずべきは、乃至十念の言葉。下十声に至るまで、乃至十念の言葉。頼みても頼むべきは必得往生、必ず往生するの文句なり」と言った。私は「信じても信ずべきはロマ書10章9節、10節の言葉、頼みても頼むべきはロマ書10章12節、13節の文句なり」と。人格や、品行や、行ないは頼りにならない。頼りになるのは、聖書の文句です。お経の文句です。